

せたかむい

年表で読む 古平の歴史

《64》

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第158号 平成14年11月1日

願イ申シ上ゲマス。

明治二十一年八月十日

古平郡群来村

干場貸渡人 相内米蔵
代理 広谷源治

古平郡長 森 長保殿

古平・美國・積丹郡長 森 長保

願ノ通リ本年ニ限リ許可スル

明治二十一年十一月十四日

鰯営業方法

一、漁 具 卷網一個

一、漁 船 二人乗り一隻

一、漁 場 古平郡群来村海面

一、海産干場 古平郡群来村二三百坪ヲ広谷源治ヨリ借

一、金(かな) 二力所

受ケル

一、絞り筒 二個

一、雇 人 四人

一、収穫高 十石

古平郡群来村海岸カラ沖ヘ才ヨソ七十間ノ内デ、魚群ノ見工

タ所へ投網シ漁獲スル

(図面に記載)

※ 文面は書き直してあります。印鑑は省略

この年どの程度の漁獲があつたのか、これ以外のことは分かれません。

■ 世界的にも重要なイワシ
イワシ漁は世界でも大変重要な漁業だといわれていますが、日本周辺やアメリカ太平洋岸で世界の過半数を漁獲していて、鮮魚の外、塩咸や乾物、缶詰などに加工されてきました。

イワシは海面近くを周遊し、岸から比較的近いところで獲れることから、日本でも早くから大量に漁獲されていて、食用にする外、本州方面では昔から肥料として重宝されていました。

外の魚に比べて漁期が長く、道南では六月から年内漁獲できる程でしたが、回遊状況が大変不安定で魚群にもばらつきが多く、鯵のように予想することが

■ 世界的にも重要なイワシ
イワシ漁は世界でも大変重要な漁業だといわれていますが、日本周辺やアメリカ太平洋岸で世界の過半数を漁獲していて、鮮魚の外、塩咸や乾物、缶詰などに加工されてきました。

■ 古平のイワシ漁
北海道のイワシ漁は天保時代一八三〇年頃に始まつたとあります。古平でのイワシ漁はいつ頃から始まつたのかは記録も無く分かりません。

明治二一年、群来町の相内米蔵が出した願書が残されています。

古平では戦前、昭和一〇年ころは発動機船によるイワシ漁が盛んになり、流し網が使われていました。古平での古い記録では明治四年、建網一、引き網一、同四年、引き網一、大正元年も同じですが、漁獲高などの記録はありません。昭和八年は全道で史上最高の八〇万石の漁獲がありました。古平町の統計としてあるのは昭和七年からで、昭和一二年には五〇〇石、同二三年には古平町として最高の六二〇石の漁獲をあげました。

この年は鯵漁が凶漁で僅かなかつたので、イワシ漁は生産額一一、〇〇〇円 (毎次ページ)

大正一〇年

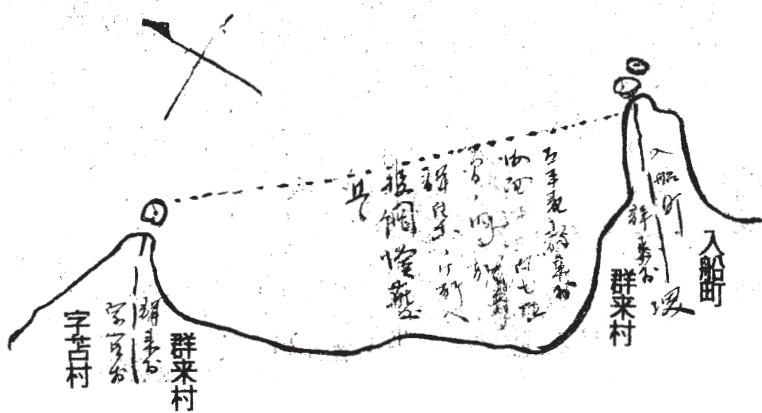
10／25 七時起床、戸外を見ると霜が降りている。いよいよ冬景色となる。家の中でも火鉢がほしくなる。一七日、仏事ががあるので、だんご作りの粉たたきや大根漬けに夜業している。
10／31 はや天長節（大正天皇誕生日）になつた。未明から暴風雨で大時化になる。月末の

売り込まねばならぬ。農園は大根抜きで忙しい。座敷の方は塗師、左官へ一五〇円余りを支払う。衣食のほかにこのよう支出は必ずいぶん大きいが、どうにか火災後もやつてこれたのも商売のおかげだ。熱心に努力し勉強して（利益を少なくして売る）こと）、ますます発展を期さねばならぬ。

11／2 未明にまだ就寝中、

相手を見つけるの日記から

【59】



▲相内米蔵の鰯漁業願書に添えた
漁場の図面▼

■事務報告などから
昭和一二年度の町の事務報告
には、次のような記載がありま
す。

「水産試験場の指導の下、いわし流し網を初めて着業する。初めてにもかかわらずかなりの漁獲を得た。大羽いわしが五月以来数年来の大漁で、二〇余隻が着業しているがいずれも相当の漁獲あり。魚油の価格が高騰して良好な状態で終わる。」

高野名幸作日記（昭和二三年）
六月一九日）から、
「イワシが大漁で小学校が臨時
休業。イワシは豊、凶漁の繰り
返しであつた。」

(この年は鮫凶漁であつた)
古平で鮫建網をしていた種田
家や吉田一穂の生家は、もとも
とイワシ漁の盛んな道南で漁を
していましたが、イワシが不漁
になつたことから古平へも漁場
を持つたのです。

意気込みは大したものだ。

11/5 昨夜からの風雨で大時化になつた。佐渡からの平安丸が入港できず、小樽へ向かつた。禪源寺の寺参りがあり妻が行く。夕方から風もおさまり少し晴れてきたようだ。五時ごろになり、古平町で電灯が初めて点灯した。町中は大騒ぎである。家でも七灯のところ二灯が故障で点灯しない。電灯会社の前では電球を買う人やら、点灯しないということで来る人などで、まさに戦場のような混乱ぶりである。事務所の前には三百燭光と百燭光の電球がついているので、見物人で賑やかなことまるで都会のようだ。七時から、田さんで部落会の集まりがあつて行く。一〇時に帰る。原首相が、一青年に短刀で刺殺されたとの風聞がある。明日の新聞でわかるだろう。

11/6 昨夜は古平で初めて電灯がついたので町中大騒ぎ。夜中に便所へ行くので起きたら座敷も店も昼のよう。古平も文化の恩恵に浴し、いよいよ電気がつくようになり感無量。この上は鉄道問題だ。原首相が凶刃に倒れたのは大事件である。新聞に詳しく出ていた。一〇時から禪源寺で禅学会がある。二時間の講話のあと昼食をご馳走になる。いろいろ話をしても一時過ぎ帰る。町では電気が珍しいので、どこでもこの話でもちきりだ。店の方も一六〇円程の売り上げがある。薄利でも大口で出ると気持ちがよい。ますます奮発せねばならぬが、何としても品物を豊富に揃えなければ、イザというとき間に合わぬ。

11/8 雨降りで道路が悪い。昨日大謀から買ったサバ、今日ぬか漬けにした。四斗樽と木箱に詰めて佐渡へ送った。そのあとサバ焼きにかかる。

11/10 五日に試験点灯後、今日二回目の点灯をするというのでまた大騒ぎだ。四時半に点灯したがみな大喜びだ。家の前の電柱には四〇〇燭光の電球がついたので、明るいことまるで真昼のようだ。

11/11 電気のつくのか遅いというので皆騒いでいる。事務所の前には子ども等が三〇人以上も集まつて、三〇〇燭光の電

刃に倒れたのは大事件である。新聞に詳しく述べていた。一〇時から禪源寺で禅学会がある。二時間の講話のあと昼食をご馳走になる。いろいろ話をしても一時過ぎ帰る。町では電気が珍しいので、どこでもこの話でもちきりだ。店の方も一六〇円程の売り上げがある。薄利でも大口で出ると気持ちがよい。ますます奮発せねばならぬが、何としても品物を豊富に揃えなければ、イザというとき間に合わぬ。

11/12 寒い寒いと思つていだ。木材会社の総会があるので三時に行く。店はカレ網の客で忙しい。電灯がついたが最初のときより幾分明るくなつたようだ。夜になり寒さが厳しくなつてきた。

11/14 天気はよくなつたが道路は悪い。入船町方面へ行き漁場を廻つてみる。沖村大謀は大マグロ二〇余本、△大謀は三〇本も獲つたとのこと。皆に大漁させたいものだ。夜南谷さんの通夜に行く。まだ四六歳の若さで家族も八人いる。實に氣の毒なことだ。

11/15 起床七時、まだ電灯がついている。久しぶりに浜へ出でてみると、大謀の起し船が出ている。この頃は大マグロが大漁なので浜も景気が良い。道路は泥田のようでひどい。この日、山田菓子屋の家具などが売りに出された。美國大謀から大網入用の電話があつたが品切れ、夜禅

間程もランプをつけていたがようやく点灯し、また大騒ぎ。町は不夜城の如しだ。

11/16 首巻きをして浜へ出てみる。沖は時化だとみて、二人来ていて一〇時頃終わる。

11/17 首巻きをして浜へ出てみる。沖は時化だとみて、二千トンぐらいから七、八〇〇トンの汽船五隻が停泊している。大謀はこのところサッパリ漁がないという。古平では△と共同で一万円、正一万円といふ。美国町では婦人大謀が五万円余りと二統で六万円、沖村三万円、介のこと。九時頃から吹雪になり、戸外はいつべんに銀世界になつた。

11/18 首巻きをして浜へ出てみる。沖は時化だとみて、二人来ていて一〇時頃終わる。

11/19 雪が五寸（約一五センチ）も積もり、すっかり雪景色となる。店は閑散だ。夜エビス講でトロロを食べる。

11/20 午後からまた吹雪になつた。小樽新聞読者慰安会があり、新地古盛座で活動写真（映画）があるので、熊さんや子どもたちも行く。港町から新地町までは電柱に街灯がついているので、夜でもちようちんがいらぬ。

11/21 朝から雪が降る。手ぐり網の時期になつたので、店もなかなか忙しい。沖は時化で

いるようで、港内には大小の汽船が一六隻も停泊している。実に壯觀で小樽港のようである。これを見ても古平は港湾として良いところなのだ。これに築港が出来たら、後志第一の良港になるだろう。

11/22 雪がさらに降り積もり少しも消えず、これだと根雪になるかも知れぬ。浜へ出て見ると昨日より汽船の数が多く、二二、三隻も停泊していて、まるで連合艦隊でも入港している。謀はそろそろ終漁、サバが少々獲れる。

11/26 今日も朝から吹雪が

はげしい。郵便局の山下さんが

来られて、電話の許可が下りた

ので、午後一時までに局に来て

くれとのこと。まずは万歳だ。局

へ行き、電話のことについてい

う。予算は二〇〇円から二五〇

円くらいで、年内にはつくだろうとのこと。帰り

【正】に寄りいろいろ話ををする。甘酒を馳走

になり四時帰る。

12/9 天気快晴。久しぶり

で太陽が輝き春光のような気分

する。美國では呑品が揃わないので

だ。雪で戸や障子が開けたてで

きない。雪下ろしをしたが、これ

12/7 珍しく快晴の天気で

暖氣だ。カレ網はみんな出た。

島泊から客があり一一〇〇間、

△へも一一〇〇間出た。この頃

馬そり五、六台で①公園へ庭石

を運んでいる。歌葉山中の海岸

から大きな石ばかり運んでい

る。五、六年したら立派な古平

名所になるだろう。

12/17 積丹からの客が来

る。美国では呑品が揃わないの

で、雪で戸や障子が開けたてで

きない。雪下ろしをしたが、これ

で真昼のようだ。

12/18 昨夜来の大雪は夜中

は大荒れ、どうとう雪になつた。

明け方が最も激しく、家の二階

は地震のよう。電灯も一、三回

消えたりついたりした。信用組

合の総会と事務所の落成式が

一〇時からある。新築の建物は

古平としてはハイカラな立派なものだ。五千一百円余りかかる

たという。定款の改正、その他で

正午頃総会が終わり、昼食にす

しが出て、一時から落成式があ

る。一五〇余名の会員と一〇数

名の来賓が出席する。つい分大

勢の会合であつたが、今後、集会

などの会場としても適当な場所

であろう。終わって一時に帰る。

吹雪で店も客がない。吹雪は夕

方から静かになつた。

(以下 次号)

11/28 暖氣になり雨が降り出す。正大謀でサバが揚がったので貰いに来いという。上ナギ

で古英丸が網を積んで来た。カレ網が出たがまだ掛からぬとい

う。サメが大漁。タラも大漁で、値段がよいのでひと漁で二〇〇

円余りのところもあり、景気が良い。

12/13 六時半に起き、朝食で歩きやすい。朝早く寒風に吹かれながら、広々としたところを歩くのも気持ちがよい。午後から銀行へ行き、電話の架設料を納めた。全部で二五〇円。これで本年中に設置できるだろう。

12/14 カレ網は皆出たが、まだ早いのか漁は無かつたとのこと。ひとりタラ漁は大漁で元気がよい。

12/18 漁もあるだろう。

程の大雪は近年稀だ。海は静かでよい夜だ。

豊富でなければならぬ。熊さんは農園へ行き、枝切りや桐に肥料をやっている。午後三時頃から雨になつたので皆帰つて来

た。大雨になる。カレ漁は七、八〇貫も獲れたというから、追々

諸に佇む女を想う

大澤文子

初秋の空は爽やかに晴れ渡り、沖合い遠く汽笛を鳴らすは何の船か。時にきらめきを見せて……。朝早くから小岩に止まるごめの群れも目ざめが早い。どこへゆくのか一羽が発てば一斉にあとを追うがに飛びたつてゆく。：ああいいなあ。時にはスケッチブックを携え下手な絵筆を握るのもたびたびのこと。誰に見せるわけでもなし。二、三行の詩を書き添えひとり悦に入る。そんな時期もあつた。

その頃であつたろうか。時折りわが家の横の浜近くにじつと佇み、沖遠く眺めている一女性を見かけることがあつた。やや肩をおとし細つそりとした後ろ姿がなぜか印象的であつた。

わたし同様、秋の海のたたずまいを楽しんでおいでかな。それともどこかお悪いのか……。幾度が窓越しに見かけるが、その弱々しい姿がひどく気につか

お節介……お節介とは思った
がある日そつと声をかけてみ
た。「海がお好きなのねエ」：
：と。その女性はひどく驚かれ
たようにハッと振りむかれた。
一層青白いやせ氣味のお顔に見
えた。「すみません」遠慮がち
に下をむいてポツリとひとこと
言われた。一瞬、私は悪いこと
をしたのではと、心を痛めた。
だが衣服の胸を押さえながら
「海を見ていると心が休まるの
でねえ……」とも言われた。
そして「この町へ越してきた
時には、海を見ただけで眩暈が
したんですよ」ともつけ加えら
れた。一言ひとことかみしめる
様に言うと、弱々しい笑みを見
せられたのだった。

「そうだったの」でも私もこ
の町へ来て海を見た時は、し
ばらく眩暈がしてつらかった
の……。私はうなずきながら心

く必要もない。ただ浜町から来たの……とだけ言われた。
何かそつと手をかしてあげた
い……そんな風情をまま見せられることのあるひと……。
私は時に詩や絵のことを話す
こともあるが、その人はいつも
彼方を指して私に話しかけるの
だった。遠くへ行って見たいね
えなんて、他愛のない話に及ぶ
こともあつたが。
だが、あんなに海を見ると心

散り……。またたくうちに過ぎてゆく年月を感じていた頃、あの細つそりとした後ろ姿の女性のことを風の便りで知った。

浜町に高野酒販店をもつておられる高野俊和氏の母上とのこと。ああそつたの……。お元気で家事に従事しておいでと聞き何かしらうれしくなつた。お伺いしてみようかなとも思つたが——。いつか年月も経ち、そして墨絵のように過去の想い出となつてしまふのだった。

だが私にとつて過去の想い出は心から大切な、そして「わたしの宝もの」であろう。

ああ今夜もまた十一時のメロディが鳴つた。私の大事な分厚い朱の表紙の覚え書帳も夜々繰るたび、朱い表紙は捲れ文字もうすく褪せてしまう。今宵は丁寧にテープで繕い、文字も重ね書きし本棚の中段にそつと收めよう、またの時まで……。

の 中 で つぶやいた。
それ以来、時々肩をならべ何
話すともなく海を眺めながら、
呴とつと話し合うのだった。

一このあした対岸遠く際立ちて
・連峰見ゆるぞきみよ来て見よ
そしていつか忘れるともなく
すべて過去となつてゆく日々だ
つた。

やがて年が移り昭和五九年一月のこと。またまた函館市に住む佐藤亀治さんから、一通の手紙が港町町内会に届いた。

佐藤さんはこれまでにも、第二出羽丸遭難のとき、自分の母も乗り合わせていたが無事救助されたということで、これまでも町内会を通じて、神社には何回も寄付金を送つてくれています。設についての依頼でした。

遭難当時、母親のツルさんは二十歳でしたが町民の必死の救助活動で九死に一生を得、手厚い看護を受けたことを常に家族に話していく、感謝の気持ちを終生忘れなかつたというのです。

北 海 タ イ ム



函館の佐藤さん

古平つ子の情け後世に 「シコロの碑」を寄贈

出羽丸遭難
73年前の

母親乗船救出される

〔古平つ子の碑〕
『シコロの碑』の前で、感慨深げな佐藤さん〔古平つ子の碑〕
永遠に! 明治末期に
「出羽丸遭難事件」を
伝える記念碑が、救出

台になった厳島神社境内

町内会に建立され、

幕式が十六日行われた。

者は当時の古平町民に命を救つてもらった函

命を救つてもらった函

館港清

事務所) を退職するの

で、この際

せめてもの恩返しをしたい。」
というものでした。

港町町内会では、神社委員長の横川幸男さんを中心にしてこの計

画を進めることになりました。

場所は海を見渡せるゆかりの厳島神社境内とし、記念碑の形なども協議し、菊池組が施工に当たりました。

記念碑は、遭難者救出の主役

となつたシコロの木にちなんで『シコロの碑』と命名され、題字は小樽海上保安本部の伊美克巳部長が揮毫(きこう)しました。

除幕式は昭和六〇年九月一六日、厳島神社祭の前日に畠澤町長、港町町内会、そのほか関係者多数が出席して行われ、その席上で佐藤亀治さんは、「今は亡き母親の供養と、七三年前、必死に救助に当たつてくれた古平町民に感謝します。」と、いうあいさつをされました。

シコロの木その後……

遭難事故のあつた後、シコロの大木の木肌を削り、『人命救助の木』と書き入れられてあります。たそうですが、そこから腐れが入つて倒れてしまつたというこ

とです。

しばらくはそのままになつて

いましたが、昭和五〇年頃になつて、「由緒あるこの木を、このまま腐らせてしまうには忍びない」ということで、残つてい

た根元をひと抱えほど掘り起こ

して、厳島神社の中に保存して

おいたが傷みがひどくなり、処

分したそうです。

その後、「二代目のシコロの木を記念として植えては……」

ということになり、平成五年のこと、亡くなられた水見八郎さ

んが記念碑の後ろに植えたのが現在のシコロの木です。

ス ム イ タ ケ ハ 北



72年前の出羽丸遭難

佐藤さん (在住)
命がけの母親救出に感謝

【古平】七十年全
に起きた出羽丸遭
難事件で、当時の吉田
に母親の命を救つ
った函館市内に住
さんが「せめてもの
に」と、厳島神社
(町港町) 境内に来
碑を建立すること
だ。

○函館港湾建設事務
佐藤亀治(さとう きいじ)
町港町
多利氏が執筆した

命がけの母親救出に感謝

古平いろはうた

出羽丸の美談伝える シコロの木

前浜で第二出羽丸が遭難

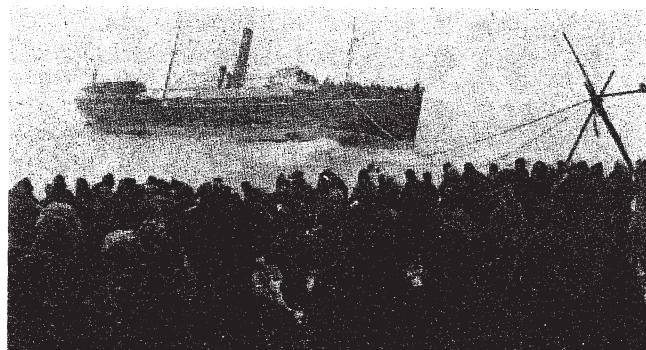
明治四五年三月一九日のこと。後々まで古平で語り伝えられる衝撃的な海難事故が起きたのです。

前日からの激しい風とそれにともなう大時化で、古平湾に避難し停泊していた第二出羽丸（五百トン）のいかり綱が切れ、強風にあおられ、港町巖島神社下の浅瀬に座礁してしまいました。

ロープを張り救助

船には、山形県の港から利尻方面の漁場に向かう漁夫と乗組員、その外に合わせて一八〇人が乗つていて、漁具や漁業関係の資材も積んでいました。前浜で起きたこの遭難事故に、警察や消防組などをはじめ全町を上げて救助に当たりました。

激浪で船体は傾き、この寒さ



<出羽丸の救助作業とそれを見守る人たち>

の中乗員の生命も危険にさらさる事態となりました。まず人命の救助が急がれ、陸と船の間にロープを張り渡してかごを吊るし、それを使って乗員を船か

プを拾い上げて來たのです。

それにさらに太いロープを結びつけて船の方でたぐり寄せ、ロープを船と、裏山の崖ぶちに生えていたシコロの大木との間に張ることに成功しました。

そのロープに竹かごを吊り下げ、それに人を乗せて船から次々と救助をしたのです。途中で波にたたかれて振り落とされるという事故もありましたが、海水も冷たい激浪の中でその勇敢な救助活動と手厚い看護は、海に生きるものの中でも広く知れ渡ったのです。

また大勢の町民が、息をつめ

通称・カネコの一郎というひとりの若者が海に飛び込み、そのロ

ープを拾い上げて來たのです。

それにさらに太いロープを結びつけて船の方でたぐり寄せ、ロープを船と、裏山の崖ぶちに生えていたシコロの大木との間に張ることに成功しました。

そのロープに竹かごを吊り下げ、それに人を乗せて船から次々と救助をしたのです。途中で波にたたかれて振り落とされる

景は、町民にも大きな感動を与えると共に改めて海難事故の恐ろしさを見せつけたのでした。

シコロの木の思い出

田附）は、幼い頃の思い出を次のように話しています。

「子どもの頃、そのシコロの木

の辺りで遊んだことがあったた

が、その木は倒れてしまつて根

は腐つたまま残っていた。ふた

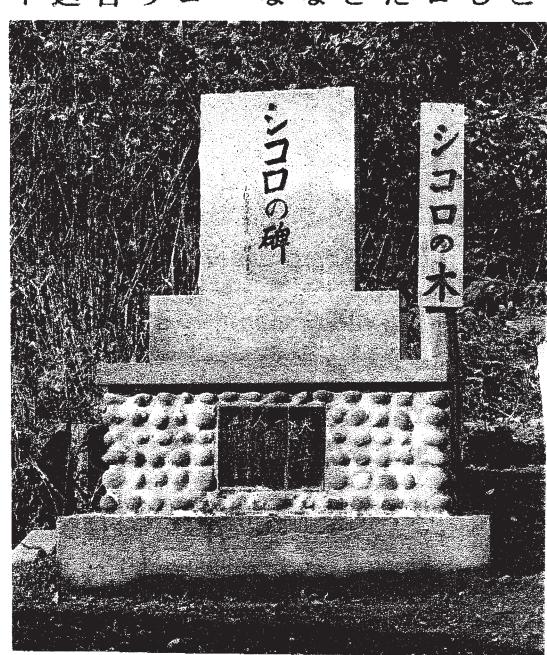
抱えぐらいもある大きな木だつ

た。また、磯の岩盤の掘り割り

に死体が上がったそうで、そこ

では泳ぐナ、と父に言われた記

憶がある。」



て見守る中で起きた衝撃的な情

救助され感謝の記念碑

戦中戦

近衛第一師団の本隊は、
陸軍大尉の連絡官として、
戦場に参戦する。

後戦

吉野慶一郎

◇戦場は遙か遠くに

昭和一六年二月八日、緊迫した世界情勢の中で、日本国内をゆるがした後の太平洋戦争が始まつた。一時は異様な雰囲気で包まれたが、その後の戦況の不利な中にあっても、戦場から遠く離れているという安心感から、日常の生活ぶりはいたつてのんびりしたものでした。

たまたま防空演習などがあつても、かお座なりで、緊迫感などは全くなく、まあ形式的なものだつた。空襲に備えて防空壕を作れ、と言わざるも、造るという人はほとんどいません。◇まさかのソ連参戦

昭和一〇年八月六日、広島に原爆が投下されたが、新聞には軍部の発表として、「新型爆弾が使用されたようだ」という記事だけが載っていました。それ

が何のことかよく分からぬいでいたら、九日になりソ連の参戦したことが新聞やラジオで報道され、突然のことには樺太の人たちの驚きようは大変なものでした。

しかし、その後は何事もなく過ぎ、「本当にソ連と戦争が始まつたのか?」と思えるような中で、昭和一〇年八月一五日、終戦の詔勅がラジオで放送され、「これで戦争も終つたか」と、一時はソ連の参戦で動搖した人たちもほつとしました。

その後も多少の不安はあつたものの、「これまで、以前の樺太にもどれる」と、誰しもほと安堵をし、町中にも活気がよみがえってきたように思われました。

◇一転して戦場に

一変しました。ソ連の大軍が車を先頭に国境線を越えて領内に侵攻して來たのです。国境付近では日本軍の守備隊との間に激しい戦闘が繰り広げられ、樺太の各地に小規模でしたが空爆が始まりました。

戦時中も比較的平穏に過ごしましたが、終戦で安堵したのもつかの間で、全く思いもかけない戦場と化し、たちまち戦争へと逆戻りをしてしまつたのです。

◇樺太から緊急避難

それでも一九日までは何事もなく、樺内と大泊間の連絡船や列車も平常通りの運行をしていました。それで各市町村では非常事態に備えて、まず婦女子に限つて大泊に運び北海道への緊急避難をするようになりました。

ちょうどその頃のことでした。国境に近い恵須取(恵須・タレヌヌ)から発動機船に引かれた、デッキばしけと呼ばれるいる運搬用のはしけ三隻

に寄港しました。戦禍を避けて避難する人たちで、これを見て船で避難しようかという人も出ました。

野田町でも、手回り品を持った婦女子をまとめて列車で送り出し、漁船を持つていてる人たちは家族や親戚、知人などを乗せ、多少海は荒れていましたが船団を組み樺内に向けて出港しました。



<昭和20年当時の樺太の鮫漁・粒貿易船で賑う港>

ました。一手に別れてそれぞれ

野田町をあとにし、北海道へと

避難を始めたのです。

私のところでは母親と娘三人は列車で、室内と幼児一人は自分でところの漁船でと、万一の事態も考え一手に分かれに行くことにしました。

◇途中、真岡で異変か

翌日になって、出港した船が真岡に入港したのかどうか、その様子を行こうと駅に行つたところ列車は出ないという。それでは郵便局に寄つて電話で安否を確かめようと、郵便局の前まで行つたら大勢の人ばかりでした。

何事かと思つて立ち止まつてみると、真岡がソ連軍の艦砲射撃を受け、その後、敵が上陸して来たという連絡が、真岡郵便局の交換手から入つたばかりだというのです。

◇気がかりは家族の安否

列車は出ないというし、電話の連絡もできないということになつてしまい、それで、急いで防空監視哨のある裏山へ登つて見たら、真岡の方角に真っ黒い煙の上つているのがはつきり見

えるのです。

うちの船も出港のとき、天候が悪いようであれば真岡に入港するかもしれないと言つていたので、もし真岡にでも入港していたら……。これは大変なことになつてしまつた。

大急ぎで家に戻つて、いろいろと尋ね廻つても情報はさっぱりなく、二週間程は全く何の連絡もつかなかつた。

そのうちに、野田から真岡に行つていて、命からがら逃げ戻つて来たという人からの話で、ようやくその後の状況がいくらか分かつてきました。

真岡では艦砲射撃を受けて港が一番ひどい被害があつたようだ。ちょうど日本の守備隊がいて上陸して来たソ連軍と戦闘になりました、そのため敵の攻撃も激しかつたということでした。家族等の安否を尋ねても全く分からぬ様子で、船はほとんどやられました。

一方、野田町はいたつて平穩のまま過ぎ、家族等の安否は気出來ずに入いるうちに、列車で大泊へ向けて出発したはずの人た

ちが戻つて来ました。

◇連絡船も運航中止

その人たちの話では、列車の運行も順調で大泊に着き、稚内行きの連絡船に乗るため順番待ちをしていたら、もう少しで乗れるところで次にまわされてしまい、その船が最後で次の船はもう来なかつた、とのことでした。それなら、もうここで待つていても仕方がないので戻つて来たというのです。

一緒に行つた阿彌さんの奥さん方にうちの家族の様子を聞きましたら、何か大泊の知り合いのところへ行くと言つていました、という話でした。たまたま、私のところの鯨漁場の船頭をしていた人が大泊にいるのだと、ひとまず無事でいることがわかり安堵しました。



◇無事を祈りながらも法要

しかし、船で行つたのはどうしているんだろうと、依然、何の連絡もないまま不安な毎日で避難に当たつては、万一の場合を考えた出発計画でした。が、こうなつてみるとそれも水泡に帰してしまつたのかと、後悔と不安な毎日でした。

そして、出港してから何の音もたもないままに早や一週間が経ちました。

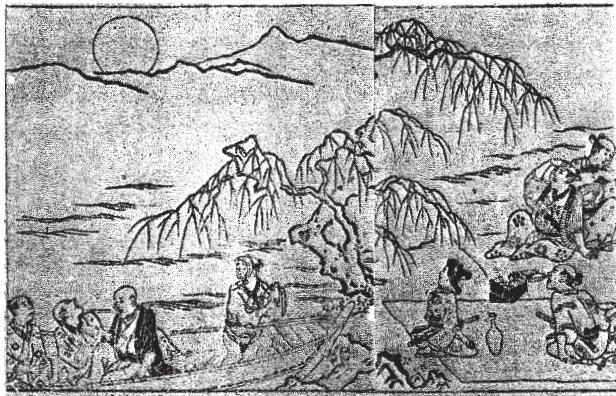
「船で真岡にいたのでは、あの戦闘で無事ではいられないだろう。もし外の土地にいるのなら何か連絡があるはずだ。」と、思ひ余つて、後になれば笑い話ですむことだが、乗船していた家族一同が集まつて初七日の法要までしました。

△ 標太略図

木村シゲさんの話 戦前の農家の暮らし

5

月の出を待つ 農家では雪
二十三夜さん が解けると
農作業が忙しく、雪の中でも、
脱穀などの仕事が終わるまで毎
日の仕事に追われっぱなし。
ゆっくりする暇もないが、それ
でも部落では、季節の行事があ
るとみんな集まって楽しむ。
一月と十一月には『二十三夜
さん』というのがある。



△江戸時代・二十三夜の月待ち
十一月のときは、部落の人々
に入つて来るし、雲でかくれた
りするところがつかりして、「今年
の作はあんまりよぐねエ」と言
いながら帰つて来る。

熊野神社に集まる。女人たち
で簡単な料理を作つて、男の人
は酒や焼酎、どぶろくを飲んで
いるし、女人人はほかに汁粉な
んか作ることもある。

集まつた人たちは『高天原』

(あづら)の祝詞(のら)やご詠
歌をあげたりして、神様も仏様
もいつしょにして月の出を待
つ。この時期の月は、熊野神社
から見るとガロの沢の方から昇
つてくる。

月の出の遅いときは待つてい
るがその間、飲んだり食べたり
し、人が集まればいつでもほう
引きが始まり夢中になつて時間
も忘れてしまう。

木の三つ又
木が生えている。
あるとき、クルミの木の三つ
又(みつまた)になつた枝が邪魔だと
いうので、そのうちの二本を切
らないが、側にはクルミの大
木が生えている。

湯殿山神社の信心が厚くて、農家の人も
方々に神仏を祀つたり、ご祈
祷をしてもらつては豊作を祈願
した。

湯殿さんも信心する人が多
く、春(三月)と秋(一〇月)
には小樽の湯殿山神社からご祈
祷に来ていた。

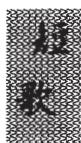
なんでもばあさんの話だと、
「その晩の月には、二体の菩薩
(ぼさつ)さんの姿が現われる」の
だという。

木村さんと泊まつて、堤の
沢から鴨居木まで廻る。ご祈祷
をする家に近所の人が集まつて
祈願をしてもらい、金を出し合
つてご馳走を作つたりどぶろく
を出したりした。

木の三つ又
家にも先代か
は切るな
ら祀つての龍
神さんがある。小さな古い祠だ
がその前に平らな大きな石があ
る。どうしてここにあるのかわ
からないが、側にはクルミの大
木が生えている。

あるとき、クルミの木の三つ
又(みつまた)になつた枝が邪魔だと
いうので、そのうちの二本を切
た人が木に登つて切ついていたと
ころそこから落ちて、運悪く下
にあつた石に頭を打つて死んで
しまつた。

迷信深い昔のこと。神様の敷
地の木は切るなどか、三つ又の
枝を切ると良くないことがある
とか、いろんな噂がたつた。
いくら迷信だといつても何と
なく気持ちが悪いので、山子の
人たちもそれからしばらくは、
三つ又の枝を切るのをいやがつ
ていたと聞いた。



古平町岬短歌会

わが町に湧き出し白樺温泉に盆にもゆけずはや秋の風
読み済みと言ひ本あまた給ひたる君をし思ふ手にとる

たびに 池田テル

白衣脱ぎて若く明るき看護婦ら廊下を通る颯爽として
窓の辺の電線を鳴らす夜の風聞きつつ逝きし入らを思ふ

奥山きよみ

十九にて逝きにしお娘の納骨堂を若き男きのこの隣に決め
しとふ

稻倉石のかつての脇はひ語る人ここらが酒場ともとほり
につつ 鈴木時子

朝露にあざやかなりし群青の夏の名残りの桔梗一輪
蝉の声聞こゆる日日の少なくてこの夏も去り木の葉
色付く 田中香苗

古平ホトトギス会

福井幸平 五句

二輪車や木の葉舞い来る散歩路
酸素吸う病の床や空まぶし
茶ばしらや明日退院の秋高し
モンゴルの空荒れまくる黄砂かな

稻倉の鉱口眠り薦紅葉 斎藤波留
迷いしか枕の鈴虫坊の宿 山口悦子
達磨絵の団扇手にせし床を観る 越野敏雄
夜勤の子帰宅を待たず颶風来る 大和田絵伊

北国の涼しき夏に送り来しさつまいもの苗植ゑて樂
しむ 東美知

前浜のテトラの上のサングラス光りを返す誰が忘れしか
堀典子

空澄みてかすかに見ゆる赤蜻蛉 関口勝志

岬澄めり東尋坊の秋澄めり 越野清治
ナナカマド空の青さの濃きことよ 仲谷比呂古

紅葉を抱く丸山美しく 室屋弘子

小春日の影を連れ來し散策路 泉清三

溪流のさやけし音に癒さるる よしざきり



古平町史年表

— 6 —

明治4年～明治5年

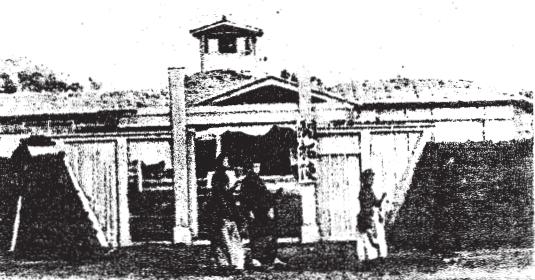
□ 明治4年(1871)

- ◆札幌に開拓使仮庁舎が完成する。
- ◆開拓使古平出張所が浜中村に置かれ、関口利勝が役人として古平出張所に勤める。
- ◆種田徳之丞から建物を買い上げ、改造し周囲に木柵を設けて開拓使古平出張所とした。
出張所の長は、少主典鈴木金吾（藤原近長）であったが、その墓が古平墓地に建っている。
- ◆この頃の調査とされている古平郡開墾絵図によると、
沖村28戸・歌棄村30戸・沢江村26戸・浜中村
124戸・垂美村（港町）39戸・谷地・入舟町35
戸・群来村28戸、合計310戸である。
- ◆種田徳之丞が丸山下の湿地帯を自費で埋立し、丸山川筋を広げ石垣で整備した。その費用は千円余りを要し、開拓使から賞詞と手当（金30両）の外、特に鮫漁場1か統の権利が与えられた。昭和になり町会議員を勤めた種田健之丞は、その孫である。
- ◆開拓使古平出張所が美國郡・積丹郡を合わせて所轄することになる。

□ 明治5年(1872)

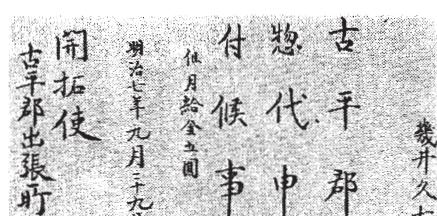
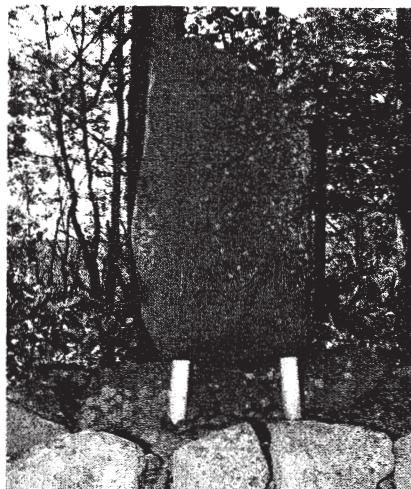
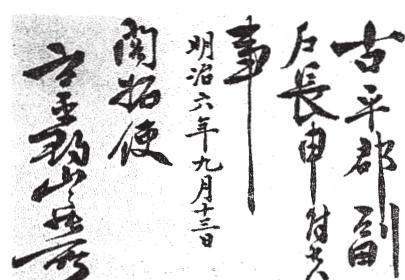
- ◆札幌開拓使庁が札幌本庁となり、函館・根室・宗谷・浦河・樺太の五支庁が置かれる。石狩国九郡と後志九郡は札幌本庁の直轄地となる。
- ◆町内に戸長・副戸長が任命され、戸長役場で事務をとったが、それは自宅でもよかった。また、町内の世話役として総代人が選挙で選ばれた。
- ◆開拓使からリンゴの苗木が交付され、チョペタンの畑（今の清丘団地公園付近）に植えつけられた。公園造成で切られてしまったようで、現在は無くなっている。
- ◆戸籍法が公布され、初めて全国的な戸籍である（壬申（じんしん）戸籍といわれている）がつくられるが、人権上の問題から後に改められる。
- ◆古平郡内の人口調査が行われる。

浜中・歌棄・沢江・沖村=180戸、581人
 垂美・群来村・入舟町= 139戸、446人
 古平郡古民（アイヌ人）= 28戸、 95人
 合 計 戸数 347戸、人口 1,122人



<札幌に建設された開拓使仮庁舎>

<墓碑・鈴木藤原近長神靈>

<古平郡惣代と
古平郡副戸長の任命書>

幾井久七

幾井久七